

はくていそうしょうぞう
 柏庭宗松像

<概要>

員数	1幅
法量	縦 107.7cm 横 49.0cm
時代	室町時代（永正 16（1519）年）

本作品は、犬山出身の禅僧、柏庭宗松（1437-1527）の頂相¹である。曲棗²に座り、濃茶の法衣に白茶色と草色を組み合わせた袈裟を肩から掛けた柏庭の姿を描いている。永正 16（1519）年 11 月、柏庭 83 歳時の賛³を伴っており、制作年が判明する点でも貴重である。

技法的には、体や衣服といった描写対象により線を使い分け、さらに、衣文⁴の表現においても布地の質感を描き分けている。顔も、細かく線描を使い分け、面的な陰影表現も意識している。さらには立体表現も丁寧にされており、全体として、眼光鋭い柏庭の意志的な相貌が再現されている。日本の頂相の中でも優れた作品である。

袈裟には金泥⁵で三種の文様が施され、画面に華やかさを与えている。後世の補筆や描き起こしと思われるものも見られるが、本来の状態を復元的に推定できるという意味では、史料価値を大きく損なうことはない。

本作品制作の頃、京都では狩野元信⁶が活躍していたが、政治的権威に密着した元信が、威儀を正した形式性の強い頂相を描いたのに対し、本作品は左膝で袈裟がまくれ、左の拳を突き出すような動的な姿を捉えている点に元信とは異なる個性が見られる。本作品は、無名ではあるが狩野派とは異なる優れた技量の画家が同時期に存在していたことを示しており、狩野派中心の絵画史を相対化する意義でも重要である。

頂相¹ 禅僧の肖像画のこと。

曲棗² 僧侶が法会の際などに用いる椅子のこと。

賛³ 掛軸形式の画面の中に書かれた詩歌や文のこと。

衣文⁴ 衣服のひだやしわの表現のこと。

金泥⁵ 金粉をにかわで溶いた顔料。

狩野元信⁶ （文明 8（1476）年-永禄 2（1559）年）室町後期の画家。漢画と大和絵を融合した新たな様式を確立し、狩野派の基礎を築いた。



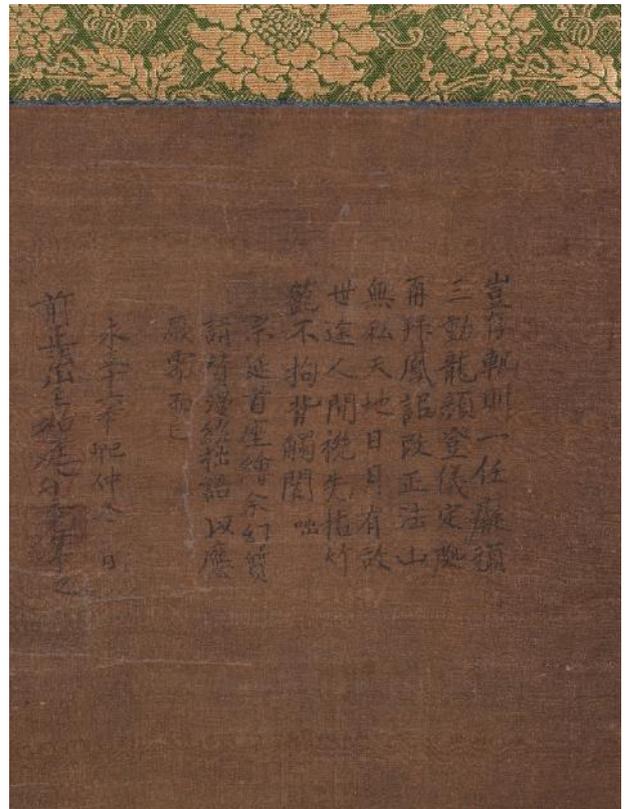
柏庭宗松像



上半身 拡大



ひざ下 拡大



賛

(画像はすべて愛知県提供)